播磨

第三卷　第五號

山角報恩寺の追儺について……西谷勝也（一）
飾磨郡の方言……玉岡松一郎（三）
印南郡神吉北山の古墳に就て……島田清（七）
寄贈誌・編輯後記……
播磨國發見形象埴輪資料集成……淺田芳郎（附一）

播磨鄉土研究同攷會

印南郡神吉北山の古墳に就て

島田　清

印南郡東神吉村神吉部落の北方五町餘の所に當つて、飯盛山から西進し來る丘端が最後的な僅かの高まりを見せて終つてゐる標高六十米餘の略々圓形狀をなす小丘がある。附近の人々から、一般に「北山」と呼びならはされてゐるのがそれである。嘗て、明治四十年、此丘上に日露戰役記念碑が立てられてより丘下を走る縣道からの通路も新設され、人々の登丘に非常な便が與へられるに至つたが、更に昨年來よりは、其の傍に西國三十三靈場が新しい姿を見せることゝなつた。此の靈場建置の際配布された由來書を見ると中に、

「（前略）北山ニ往昔景行天皇ノ皇子ノ御陵跡アリト言傳ヘタルモ詳ナラザリシガ、明治四十年日露戰役記念碑建設ノ當時、此の山頂を切開キシニ粗造ナル石棺ニ朱ヲ詰メタル跡アリ。全クロ碑ハ之ナランカ。（後略）」

と、いふことが記されてゐる。然し、此の村内での口碑といふのも、ごく漠然とした稀薄なものであり、丘頂も通常のそれに比して何ら特別に注目されるやうな形狀を示してゐなかつたため、建設工事中の明治卅九年、本古墳が發見されたのは當事者にとつても實際に偶然であつたとのことである。當時立會はれた同部落の神吉亀太郎・勝山寂明兩氏の御話によると其の内部構造は大略左の如きものであつたらしい。

即ち、表土よりは約二三尺下に、蓋石は認められなかつたが略々縱四尺・横二尺・厚さ三寸乃至五寸の板狀をなした石材六枚をたてゝ、長さ六尺・幅三尺・深さ二尺の石室をかこひ、（短邊部は何れも一枚の石材を用ひ、長邊部には四尺と二尺の二枚を立てならべて）、内部に相等の朱を混じた土を容れてゐるものが埋置せられてゐた。而して内壁では、深さ一尺のあたりより五六寸下までの上表部分に朱の附着が認められ、其の下方に長さ五尺五寸・幅二尺六寸・厚さ約四寸の蓋石とも思へる一枚石が水平に横はつて居たのであつたが、更に此の石を取除けば、下部一帶に線香灰の如き白色のものが一分又は二分の厚さでぎつしり詰められ、そこには土は勿論朱も全く認めることは出來なかつた。次で、更に其の下を掘つた所、二枚の石材を並べて作られた底石にぶつつかつたきりであつて他には何ら遺物らしいものゝ存在を發見することは出來なかつた、といふのである。

兩氏の記憶に殘されてゐる本古墳の狀態は大體以上の如くであるが、この遺蹟が所謂阿波式石棺と稱する古墳時代初期のものとされることは其の持つ形式から見て畧々正鵠を得てゐると言はれねばならず、播磨に殘存する這種遺跡として有名な飾磨郡餘部村飾西東山山上の五例の他はあまり明瞭でない現在、郡

誌にも詳報されなかつた其の一例をこゝに加へ得たことは愉快を禁じ得ない。殊に、本遺蹟が其の構造に於て、不規則なる石材を集めて作られたり、又よし板狀のものが撰擇されたとしても貧小なものに過ぎない前記東山のそれに對して、大體揃つた九枚の板狀石材を使用しての相當整齊した技術を示してゐる點及び底部が前者にては河原石を敷きつめて作られてゐたに對して板狀石材にて營まれてゐた點、更に蓋石に該當すべきものが彼にはあつたにかゝはらずこれにはなく、內底に線香灰狀の如きものを蓋うて一枚の石材が入れられてゐた點など東山例とは稍々著るしい相違が認められると共に、（神吉、勝山兩氏はこれを蓋石が落こんだものとされてゐる、或はその通りであるかも知れないが、朱の附着が其の石の下に及ばず、且、其の下方が灰のみにて土を混じてゐない點からは、最初よりの存在をも考へさせられ、却つてその方が一層有力であるかにさへ思はれる）內部埋藏物に於ても、それに朱を詰めたことは共通であるが、人骨又は鐵劍を掘出した彼の遺蹟に比してそれらしきものゝ一切を被見出來ず、僅かに最下底の兩石材に挾まれて一分乃至二分の灰狀物質の存在したに止まることは、播磨に於ける當時代遺蹟研究の前進のために一層深く觸目記憶されねばならない所であらう。而して、底部の灰狀のものが果して何であり、又それを蓋ふ石材の原位置が何處であつたかは本遺蹟の性質考察上、極めて重要なもので、これの如何によつては或は本遺蹟が單に形態上の類似を示すからといつて純阿波式石棺遺蹟とすることを許されなくなるかも知れないが、現在にては此の點を明瞭に出來ぬのは已むを得ないとはいへまことに遺憾に堪えない所である。

顧みれば、神吉附近が『播磨風土記』に明示されてゐる如く當時の印南地方に於ける文化的中心地帶を形成してゐたらしいことは、すぐ西に隣接して現存する中西廢寺趾の心礎なり、遺瓦なりを研究しても、其の一斑を推察するに難くはなかつたのであるが、更に一歩を進めてそれ以前に於ける本地方の文化史的意義を檢討しやうとする時、我々は直ちに其の資料の不充分に困惑を感ぜずには居られなかつたのである。何故ならば、少しはなれた「稚兒の窟」・「升田山」等の古墳を除けば、神吉近傍に遺蹟らしいものゝ殘存が認められず、たとへ附近に古墳の內部主體である石棺の搬出流用が數多く散見されるのを、本地方のそれら遺蹟の破壞によるものとしても、單にそれのみを以て嘗ての文化史的特殊相を闡明することは全く不可能であつたからである。今回、それに對して、偶然ながら貴重な一資料を提供し得たことは、本地方文化史研究の爲にもまた播磨に於ける這種遺蹟—延いてはかゝる時代文化—研究の爲にも喜ばしいことであると思ふ。（昭和九年八月九日稿）